

花 き

実 況

1 キ ク

奥越の秋植え夏ギクは、平地の畝に積雪がみられないため、3月上旬より不織布被覆が行われている。和泉等の山間部では10cm程度の積雪がある(3月中旬)。春植えギクでは親株育苗ハウスで採穂が3月25日前後に行われた。

あわら市では無加温ハウスで採穂、挿し芽が行われている。一部のハウスでは5月咲きにトンネル被覆による促成栽培が行われている。3月14日に被覆が外された。

福井の平坦部では、春植え8月咲きギクの定植が4月上旬に行われる。今年は3月の寒暖の差が大きいが生育は順調である。アブラムシの発生が見られ、一部の圃場では白さび病が微発である。

丹生の春植えの品種は、「はじめ」「小雨」「小鈴」「翁丸」「花絵」「恋心」であり、昨年と同様に12月上旬から畝を作りマルチ被覆を行っており、0.5haに作付予定である。挿し芽は3月中旬から開始して、4月中旬ぐらいまで順次行われる。2月の天候の影響で品種によって芽立ちに差が出ているが概ね生育良好である。白さび病が微発である。

二州、若狭地区では3月下旬から挿し芽を開始し、4月15日頃の定植を予定している。

2 ユ リ

LAユリの県育成品種「福井ユリ」は、福井市、あわら市、坂井市春江、鯖江市で季咲き栽培が約5,000球程度作付けされている。

春江では3月中旬にかけて、「リッチモンド」「ランデーニ」「ベルメール」「ブラックアウト」等の球根が定植された。

あわら市の「レッド」はやや短く30~40cmで、開花期は5月下旬の見込みである。

永平寺では、3月9日調査で冷蔵処理されたレッドが生育に差があり、草丈30~60cm(60cm)となっている(昨年3月17日調査)。

福井市では3月9日調査で据置した「レッド」が5cm(7cm)であった(昨年3月17日調査)。

鯖江の12月上旬に定植された「福井ユリ、レッド」は3月9日調査で、冷蔵処理球根が昨年に比べ萌芽が早くなったが、草丈のバラツキは大きく、20~50cm(昨年冷蔵無し3cm)であった(昨年3月17日調査)。

3 トルコギキョウ

あわら市の「レイナホワイト」は二度切り栽培が行われているが、昨年より新芽の伸びが早く、12cm程度である。生育や開花は平年並みになる見込みである。

南越地区では、「モレットマリン」「ブライダルスノー」が3月11日調査で9月中旬播種、11月上旬定植の作型で、草丈10~12cm、本葉6~7対(5~6対)である(昨年3月18日調査)。

若狭では3月14日調査で1月下旬定植作型が本葉4対となっている。また、8月採りの作型が3月上旬から播種されている。

4 ストック

坂井北部丘陵地は、1戸のみ3月下旬まで出荷が続く見込みである。

南越地区では、9月上中旬定植の「カルテット」シリーズが3月11日調査で草丈90cm

と昨年同様、2月上旬から3月上旬まで出荷された(昨年3月18日調査)。

若狭では、3月14日調査で「アイアン」シリーズの11月下旬定植で草丈60cm、一部が開花はじめ(昨年収穫始め、昨年3月19日調査)、「カルテット」シリーズは12月上旬定植で草丈50cm(昨年一部開花)となっている。

5 その他

福井南部のヒマワリ「サンリッチパイン45」、「サンリッチオレンジ」は3月11日調査で3月下旬に播種される予定である。圃場の準備が進んでいる。

対 策

1 キクのハモグリバエ類とカブラヤガの防除

- (1) ナモグリバエは4~5月にキクの暮れ植え栽培の株や、葉肉の厚い品種に発生するため、薬剤防除を予防的に行なう。例年被害が目立つ品種は、オルトラン粒剤(ハモグリバエ類に登録有)、スタークル顆粒水和剤(ハモグリバエ類に登録有)等を用いて、前もって防除しておく。
- (2) 5月まではナモグリバエ、6月以降にマメハモグリバエが発生し優占種が変わるため、多くの種に効果がある薬剤を選定する。特に本年は3月が温暖な日が多く、ナモグリバエの発生が多い可能性がある。浸透移行性のあるダントツ水溶剤(ナモグリバエ、ハモグリバエ類登録有)、アクタラ顆粒水溶剤(ハモグリバエ類)、ジェイエース水溶剤(マメハモグリバエ)を組み合わせる。
- (3) ハモグリバエ類の幼虫が入った葉は二次発生と黒斑病や他病害の原因となるため(写真)、下葉かきをかねて除去する。被害がひどい場合は、落とした下葉も圃場から除去する。
- (4) 新芽が食害により倒れる場合はカブラヤガの存在が疑われる。捕殺するかカルホス微粒剤Fを地際に処理する。基本的に接触毒であるため、植物の株元処理が有効である。



写真 ナモグリバエ幼虫の食害孔道(右)と孔道が腐生菌に感染したもの(左)

2 キクの挿し芽作業

- (1) 採穂の1~2日前に親株の病虫害防除を徹底する。芽の伸長初期には、保護殺菌剤、有機リン剤等の散布により、アザミウマ類や白さび病防除を徹底する。
- (2) 採穂時間はしおれやすいため、早朝に取るのがよいが、極端に露が多い時間帯は避ける。
- (3) 摘心した親株から採穂する。極端に生長したものからは採穂しない。挿し穂は手で摘み取り、展開葉3~4枚をつけ、長さ5~7cmに調整する。
- (4) 挿し穂は冷蔵すると挿し芽後の生育がそろろう。冷蔵する場合は、発泡スチロールの箱に、挿し穂の切り口を下にして1列に並べて詰め込み、5℃の冷蔵庫に7~10日、2℃で2週間まで冷蔵できる。
- (5) 軽い挿し芽用土は作業性がよいため、パーライト5+クンタン5、バーミキュライト5+ピートモス5等を用いる。

- (6) 土詰め後の用土は十分に吸水させておき、はし等で深さ 2cm くらいの挿し穴をあけておく。
- (7) 挿し芽間隔は葉と葉がわずかに触れ合う程度とする。間が空きすぎると活着が遅れる。挿し芽後十分にかん水し、挿し穴が塞がれるようにする。遮光下の暖かい棚上に置き、10日目以降少しづつ遮光をはがしてゆく。温床上で14日、無温床で20日で苗ができる。

3 トルコギキョウの管理

- (1) 定植後は、活着と初期生育を促進させるため、根が張るまで十分に灌水する。特に、花のボリュームを出すため、花芽分化が始まる本葉8対（草丈が15～20cm）頃までは水分や肥料を十分に与える。二度切り栽培は、草丈が10～20cmに達した時点で、生育が良い枝を2本程度残してその他の枝を取り除く。多く枝を残すと、花のボリュームが出ない上、ネットと枝が邪魔で収穫がしにくくなる。
- 上葉が小さくなるうらごけがみられる場合は、圃場排水に努め、生育状況をみながら、液肥を施肥する。葉先枯れが出やすい品種は、カルシウム入り液肥の葉面散布を行う。
- (2) 春植えは、活着後の生育の状態を見ながら液肥（OKF-1の500～1000倍など）を中心に追肥する。
- (3) 定植後に生育が停滞し、葉が淡黄色になって枯れる場合がある。これは主に塩類濃度（最適EC0.3～0.5mS）が1.0mS/cm以上と高い場合に発生する障害の可能性があるため、圃場準備の際には土壌分析を行い、施肥量を調節する。また、ECの値が高い場合は、定植前に水をかけ流したり、床の表土を削り落とし、塩類を除去する。
- (4) 土壌酸度が低い時も同様な障害が発生する。pHは6.5前後がよく、酸性土壌ではマンガン過剰の症状、上位葉先端や周縁部に黄白斑点、新芽の萎縮が見られる。1㎡あたり深さ10cmの土壌のpHを1上げるのに必要な石灰資材は粘質土で120g、砂質土で80gとされる。そこで、対策としては薄い石灰水（消石灰などの石灰資材を100g/水10ℓに溶かす）10ℓを3㎡に土壌施用する。効果が不十分であれば再度施す。
- (5) 立枯病はフザリウム菌とピシウム菌によるものが主である。フザリウムの病斑は灰白色粉状のかびが密生する。耕種的防除として過湿を防ぎ丈夫に育て、発病株は、抜取り焼却する。
- (6) 葉先枯れ対策には、日中の換気を十分に行い、軟弱徒長にならないように管理する。雨や曇天が続いたあとの好天で発生しやすいため、雨や曇天の日は、扇風機や暖房機の通風運転で施設内の空気を常時動かすようにする。また、降雨によるハウスサイドからの雨滴で灰色かび病や立枯病の発生が助長されるので注意する。

4 ヒマワリの播種と育苗管理

- (1) 天幅 90cm の 50m 畝では約 2500～3000 本の苗を植えるので、種子量は 5 dℓ（約 4000 粒）必要である。催芽処理として、播種前に種子をガーゼで包み、水に浸漬して 48 時間冷蔵庫に入れる。水が腐らないようにするため、24 時間後に水を替える。
- (2) 200 穴のセルトレイに播種する。種子は横向きに並べ、種子が隠れる程度に覆土する。覆土後は新聞紙で覆い、十分灌水する。
- (3) 発芽温度は、20℃以上（発芽適温 26℃）を確保する。低温で発芽揃いが悪くなると、その後の生育にも影響する。放射冷却で低温になる時は不織布をベタガケする。
- (4) 3～4 日で発芽が始まるので、新聞紙を取る。発芽時に子葉についている種皮が取れないようであれば手で取り除く。
- (5) 若苗定植が原則なので、最初の本葉が展開した頃（播種 10 日後）に遅れないよう定植す

る。

(6) 早生品種は4月下旬播種で6月中旬に開花する。「サマーサンリッチパイン」「マンゴー」「オレンジ」の順に開花する

5 スイセンの春以降の管理

- (1) コンテナ栽培のスイセンはハウスの外に出し、朝日が当り、夕日の当たらない場所に移す。ハウス栽培のスイセンは気温が20℃程度に管理できるように、日中はハウスを開放し、夜は保温のため閉めるように温度管理を行う。できるだけ葉を成長させて、切り下球の肥大を図る。ハウス内が直射日光で高温になる場合は寒冷紗等で遮光し、ハウス内室温をできるだけ下げる。灌水は適宜行い、土壌が湿っているように管理する。極端な乾湿は避ける。
- (2) 養成中のスイセンは球根を肥大させるため、3月に施用してない場合は4月上旬までにそさい5号を10a当たり40kg施用する（窒素成分量6kg/10a）。
- (3) 灰色かび病等発生が見られる株があるときは、ゲッター水和剤1000倍液で防除する。
- (4) 5月下旬までは十分に光合成をさせて、球根の肥大を促進する。
- (5) 6月上旬ぐらいに地上部が3分の2程度枯れたら、掘り上げ準備を行う。その時に残った茎をつけたまま掘り上げ、風通しの良い日陰で乾燥させる。